

## V： 新生児医療連絡会設立の軌跡：個人的20年史として振り返る

新生児医療連絡会を設立することに関わったことは、私の人生の中で最も大きな出来事であった。多くの仲間と、当時置かれた泥沼の中を歩むような新生児医療と、新生児医療に欧米並みの人格を与えたいと口角泡を飛ばして議論し酒を酌み交わした日々が、昨日のように思い出される。

### 1. 「41+/-2の会」から連絡会発足まで

内藤先生の追悼文集『彼とこどもたち』の中の「内藤先生と新生児医療連絡会」にあるごとく、「41+/-2の会」は寂しがり屋の内藤先生が人恋しさに作った会とか、『中年新生児屋のぼやきの会』と言われたが、若くして日本唯一の小児病院の新生児科の医長となった彼が、全国から研修に来る新生児を目指す小児科医のために何かしなければならないという思いから、仲間に声をかけて出来たものである。

NICUは国立小児病院(当時)内にある唯一の集中治療室でありながら、定員はアレルギー科等の小児科他分野と同様に医長1名および医員1名と一律であり、内藤先生も含め新生児科医師は連日の重症当直のような日々が続いていた。彼が「ICUであるから特別な定員の配置を」と医局に訴えると、「アレルギーでも夜間重症が来る」と鼻であしらわれ、人の良い彼は悔しさと無力感に何度涙を流したとか。酒の弱い彼が、なぜか酒の強い井村先生と気が合ったのは、多分酒を介して彼の愚痴を井村先生が受けてくれたからであろう。その広がりとして「41+/-2の会」は出来るべきして出来、そしてそれが成るべきして連絡会に発展して行ったのである。

### 2. 連絡会発足の黎明期を振り返る

すでに述べたように、内藤先生を囲んだ41+/-2の会が発展解消して、新生児医療連絡会が誕生したのであるが、その経緯は今の新生児医療がおかれている状況にも一脈相通ずるものがあるところから、当時を知る者として時系列的に振り返ってみることは意味があるかもしれない。

1) 1983年10月15日、岩手で行われた第28回未熟児新生児研究会(藤原哲郎会長)において、内藤先生が、標榜科問題などに代表される産科側からの新生児側に対する圧力に対して、みんなと話し合いをしたいと言ったことから、たまたま現地の小川小児科医会長(前日本小児科医会副会長)の御子息が筆者の勤務していた北里の小児科であった縁でお世話になり、鎧兜などが飾ってある名のある料亭で30人ほどの新生児仲間が会食した。今から考えれば、それが連絡会の構想が生まれるきっかけとなった最初の会合であった。

2) 1984年3月28日、内藤先生の声掛けで多田・井村・仁志田の4人が京王プラザホテルのバーで行なった『新生児医療連絡会（仮称）発起人会の発起人会』なる珍妙な名前の集まりが、連絡会なる名称で持たれた初めての会議であった。その後、第二回が同年4月18日に国立小児病院内で同じ4人のメンバーで行われ、第3回は5月12日に41+/-2の会として企画された『小林登先生を囲む会』の際に会員9名全員（志村・岸本・中村・後藤・竹内・多田・井村・内藤・仁志田）による話し合いがもたれ意思の統一がなされたのである。しかし関東で産声を上げた新生児医療連絡会の構想が全国的な組織となるまでには、もうひとつのハードルを越えなければならなかった。

3) 1984年6月10日、新幹線駅近くの大阪コロナホテルにおいて、関西の新生児の中心となっていた中村 肇先生・藤村正哲先生・橋本武夫・竹峰などの面々に、多田・井村・内藤・仁志田それに賛意を示してくれた小川雄之介先生を加えた関東の新生児屋が、縷々その設立の経緯やそれに込められた思いを熱弁した。当然のことながら、41+/-2の会のステップを踏んだ東京グループと、風の便りにその動きを聞いていただけの関西側とでは明らかな温度差があった。直ぐにでもお互いの意が通じて祝杯を挙げる算段であった東側の思惑は空振りとなり、合意は持ち越しとなったのである。

4) 1984年7月19日に岡山で行われた第20回日本新生児学会(山内逸郎会長)の際には、内藤等が東西対野球を口実に、全国各地で中心的役割を担っている新生児屋に声を掛け、再び熱い議論の場がもたれた。実は野球そのものは、山内会長の鶴の一声で中止となったが、その時交わされた話の中で、各自が置かれている余りにも恵まれない状況は、決して自分だけの問題でないことが明らかとなり、お互いに力をあわせて活動できる組織を作ることの必要性の機運が盛り上がったのである。まさに災い転じて福となるがごとく、全国レベルの連絡会設立のコンセンサスが生み出されたのはこの時であった。

それから約1年弱の間、再び勇気を得た41+/-2の会のメンバーが、内藤先生を中心として何度かの会合を持ち、西側の仲間の納得の出来る連絡会の構想を練り上げて行った。会合は、41+/-2の会の仲間で、勉強会と称して講師を囲む小宴形式であったが、いくつか忘れがたいエピソードがあった。山内先生を囲みホテルのスイートを借り切って泊り込みで行った会では、普段聞けない新生児医療の暗黒時代の先人の苦労話に触れることが出来た。坂元正一先生を招いたときは、10時ごろに「お車を呼びましょうか」と言うと、「まだ話は始まったばかりです。帰れというなら帰りますが朝まで話しても良いつもり

で来ました。」と答えられ、なんとその晩は、久しぶりの NICU の当直並みに朝方まで、産科と小児科のリエゾンがいかに大切かなど、彼の新しい医療への情熱に圧倒されながら語り合ったのである。

5) 1985年5月15日、新生児仲間の思いが実を結んで連絡会は産声を上げた。当日、東京八重洲富士屋ホテルに、西からの代表として竹峰・橋本両先生を向かえ、41+/-2の会員を加えた11名により、まず『新生児医療連絡会(仮称)発起人会』が発足して議論がなされ、同日ついに新生児医療連絡会が発足したのである。その時に採択された設立趣意書(資料2)・会則(資料3)・組織図(資料4)・活動目標(資料5)および活動項目と役割り分担(資料6)を読み返すと、明治維新の志士のような高ぶる意気込みが読み取れるであろう。

6) 1985年7月17日第21回新生児学会(岩井誠三会長)の折、竹峰先生のお世話で、神戸市湊川神社楠公会館において、第一回の新生児医療連絡会が行なわれた。ここに、内藤先生の暑い情熱の塊がようやく実を結んだのである。その記念すべき連絡会(役員会)の議事録(資料は事務局)によちよち歩きの連絡会の姿を読み取ることが出来るであろう。

特筆すべきことは、全く財政的基盤のない会に、神戸市関小児科医院長より20万円の寄付をいただいたことである。多くの会員は故関先生のことをご存じないであろうが、民間の個人小児病院で日本初のTAPVRのオペをした以上に、個人的な努力で新生児搬送を行なわれた方である。学会の折に関先生に神戸の六甲山麓の料亭にお招き頂いた時、岩井先生と「新生児を搬送中に状態が悪くなったので車を止め挿管使用としたら、雪が赤ちゃんの顔に降ってきましたね。」と昔を懐かしむように莞爾と微笑みながら語られた姿が忘れられない。すごい先人がいたのである。関先生は、かつての自分の夢が一つの形となったと受け取ってくださり、心から私たちの連絡会の活動に期待されていたのである。) )

### 3. 初代事務局(1985年7月—1988年8月)活動報告

初代連絡会事務局は東京女子医大母子総合医療センターに置かれ、仁志田が事務局長として、計13回のニューズレター発行を含めた活動を行ってきた。当然内藤先生が初代会長で私が事務局長で彼の思想を形にする役目を負うわけであった。しかし発足当初に規約や役職名の不統一だけでなく、内藤先生の表に立つことを好まない性格から、彼は事務局渉外係りなどの役を引き受け、間もなく馬場先生が主催する幾つかの学会の事務局として多忙な井村君を支えるた

め会計を引き受けられた。その間、1985年12月31日に、内藤先生の自死という衝撃的な出来事を経験した。ニュースレター特報にあるごとく、それが彼が私たちに残した最後のメッセージであり、彼の死をむだにしない、という思いが今日の連絡会を核としたわが国の新生児医療の発展につながったと確信している。

約3年間の事務局業務の中心であったニュースレターの原稿は仁志田の独断と偏見による作成で、それをコピーして会員に送る作業は数人の母子センター新生児部門の医師たちのvolunteerによるものであったが、忙しいNICUの仕事の中で、喜んで参加してくれた。それは、自分を含めた明日の日本の新生児医療の環境改善に寄与するものであると信じてくれたからであり、それは事務局が関西に移る時に、「ホッとしたけれども、あのみんなでニュースレターを新生児仲間宛の封筒に入れる作業がなくなることに一抹の寂しさを感じる。」とポツリと漏らした加部君の言葉が物語っている。

#### 4. 東西野球大会

連絡会の中心人物の内藤・井村両先生が野球少年であったことから、会発足以前から新生児仲間で草野球を行っていた。内藤先生は、東大医学部の野球部に入部していたが、6年間の唯一のバッターボックスに立った経験が、ランナーのいない時のピンチヒッターであったが、どうゆう理由か不明であるが一度もバットを振らない間に交代になってしまったという。一方、井村先生は甲子園を目指した高校球児であり、なんとあの王選手のいた早稲田実業と相まみえてその夢を断たれたと豪語していたが、自己申告でありその真偽は定かでない。

連絡会が発足してからは、新生児未熟児学会の前日に行う恒例の東西対抗戦となり、第1回は西宮球場、第2回は後樂園球場、第3回は香川県営球場（県営とはいえ東西プロ野球対抗戦が行われた名門球場！）、第4回が中日球場と、すべて身の程知らずの一流球場で行われてきた。馬子にも衣装と各々西軍はAsphyxias、東軍はInfantsとチーム名を入れたユニホームを揃え、初代監督は西軍が竹峰先生、東軍が内藤先生であった。後樂園球場ではなんとナイターゲームであり、学会のゲストスピーカーとして招待されたアメリカのBangard教授が始球式を行い、カクテル光線（といっても外野にはボールが飛ばないことを予想して、経費節約目的で照明は内野周辺だけであったが）の中で、一同まさに気分はプロ野球選手であった。小生も大方の予想を裏切って大活躍し見事なヒットを打ったのであるが、塁に出ていたランナーがまさかと思ったのかモタモタしている間に、足の速い(?)小生が追い抜いてしまい、あえなくその走者がアウトとなってしまった。それに尾ひれがついて『仁志田先生はヒットを打ったのは良いが三塁方向に走った。』という風説が流れたが、野球が数少な

い子どもの遊びであった時代に、裏町の野球少年であった小生がそんなことをするはずは断じてない。残念ながら西軍には小粒ながら豪速球の近藤（乾）先生や、何をやらせても上手すぎる橋本・池ノ上先生という三遊間コンビがおり、東軍は連戦連敗で、とうとう「九州対その他の全日本でやろう」とまで言われる羽目であった。

この楽しかった思い出が途切れてしまったのは、山内先生に学会に遊び道具を持ってくるとは不謹慎である、とお目玉を食らったこともあるが、それ以上に野球が好きであった内藤先生がいなくなったことが一番の原因であったと思っている。野球がかつてほどの人気なくなったが、それならそれ以外のスポーツで、仲間同士がストレスフルな日常を離れて交流する機会を、連絡会という場がセットしてくれる意味があるのではないかと、昔を思い出しながら考えている。

## 5. 産婦人科との接点を巡る歴史的足跡（新生児の identity を求めて）

連絡会が出来た力学のひとつが、産科と小児科の狭間でその identity の確立していない新生児屋と呼ばれていた仲間がお互いに助け合ってその立場を何とかしたい、というものであった。連絡会が設立された20年前は、産婦人科学教室とよばれる専門集団は、先人から受け継いだ自分たちのテリトリーのひとつである新生児医療が、小児科側にとられるという感覚があったことは、今の若い人達には理解出来ないであろう。ほとんどの大学および施設で産科が新生児医療を全面的に小児科・新生児科に依存している現在とは隔世の感がある。連絡会の歴史の中で、産科との軋轢の中から identity を確立していった足跡を追ってみることは、多分今これから起こるかも知れない出来事であり、なにかの役に立つのではないかと、そのいくつかのエピソードをニュースレターやその添付資料から拾ってみる。

### 1) 標科を巡るエピソード：

連絡会発足の1985年、日母医報に「新生児（未熟児）診療にかかわる標科科新設について」と題する日産婦学会からの意見声明が掲載されている。その内容は、その分野で努力してきた産婦人科側に諮問なく、小児科側が単独で厚生省に未熟児科新設の要望書を出したことに対する遺憾の意を表すものであった。当時、リウマチ科などのいくつかの標科科新設の動きがあったことから、山内逸郎先生が厚生省のドンであった橋本龍太郎氏と親交があるところから、個人的に話を進めそこまで行ってしまったというのが実情で、つんぼ状態に置かれた産婦人科側の反応は当然であった。産科側は橋本氏を学会をあげて落選させる、とまで険悪な事態になり、小児科側から自主的に取り下げて一件落着とな

り、これをきっかけとして、産婦人科と小児科の新生児に関する合同委員会が持たれるようになった。

## 2) 専門医制度と新生児 identity

標榜科と専門医は表裏一体であり、新生児専門医の話題が連絡会でも取り上げられた。もともと、新生児を専門とするも者の identity が欲しい、というのが、連絡会会員の大きな望みであり、新生児専門医の名称は、多くの新生児医療に身を置く者の夢であった。先に述べた産婦人科との合同委員会で、周産期医療に関する専門医制度が俎上にのせられたことを、参加していた仁志田・多田等がその経緯を連絡会総会で報告したところ、当時は若手の最精鋭であった田村（現埼玉医科大学総合医療センター教授）等に、新生児の専門医を創るという事は第一線の現場で働いている私たちを切り捨てるのか、と噛み付かれ、「親の心子知らず」の心境で思わず涙したことを思い出す。現在、具体的な形を取るようになった周産期新生児専門医制度は、長年の夢が一つの形に実を結んだものであることを喜んでいる。

新生児の identity を巡る話題として、現在連絡会の事務局をサポートされているメディカ出版の故長谷川社長を忘れてはいけない。私たちの悪戦苦闘の毎日を見ていた長谷川氏が、何とか新生児屋の人たちにエールを送りたい、と考え、彼らの identity の拠所あるいはシンボルとして、新生児に特化した雑誌である『NICU』（現在は「ネオネイタルケア」）を創刊することを申し出たのである。ありがたかったが、対象人口の少ない雑誌 {NICU} が商業的に成り立たないことは目に見えていたところから、私たちは否定的な意見を述べたのである。しかし、長谷川氏には、ビジネスを離れた男のロマンのような心意気があった。その経緯は『NICU』創刊号巻頭言に詳しい。

## 3) ペリネイタルビジットを巡る産科とのトラブル

本邦におけるペリネイタルビジットは、1990年の「これからの母子医療に関する検討会」の報告を嚆矢に、いくつかのステップを踏んで1992年厚生省より「出産前小児保健指導事業の実施について」が公示されるにいたった。しかし、小児科学会新生児委員会が産科との話し合いなく「出産前小児保健指導問答集」を作成したことが産婦人科の逆鱗に触れ、1992年8月日本母性保護医協会坂元正一会長の名前で抗議の書簡が小児科学会長および母子衛生課長に出され、すでに印刷済みの数万部の「出産前小児保健指導問答集」が廃棄処分となった。小児科側の一方的と得る謝罪で一件落着し、幸いにも、両者の合同のワーキンググループが出来て、ペリネイタルビジットの実際の運用が可能となる作業がおこなわれた。このことも、小児科と産婦人科のお互いの母子

医療を巡る軋みを象徴する事件であった。このワーキンググループにおいて連絡会が果たした役割は極めて大きかったと評価されている。

#### 4) 西南病院事件顛末記：

内藤先生が連絡会構想を持つきっかけとなった高知の西南病院で起こった出来事で、新生児仲間では西南病院事件と呼ばれていた。それは病院NICU改装に当たって、当時高知医大は産婦人科が新生児をテリトリーとしており、関連病院であるところから、新生児医療で全国的にも高い評価をされていた澤田小児科部長の意思を無視して行われたところから、同じ長崎大学出身であった増本先生が、義憤に感じ意見を述べたところ、高知医大産婦人科の怒りを買って逆に名誉毀損の訴え云々になってしまった。増本先生は澤田先生に迷惑が掛かることを抑えるため、意に反して詫び状なるものを書いたのである。増本先生が、悔し涙を流しながらその顛末を私たちに語ってくれた出来事は、当時の新生児医療の置かれた立場を象徴する歴史の1ページとして忘れることが出来ない。

以下に、連絡会20周年誌の載せられた澤田先生の一文を転載する。

1985年の未熟児新生児医療連絡会の席上、各地域の現状報告として、私が「高知医大ではまだ産婦人科がNICUを見ている」と報告し、その報告を仁志田先生がニュースレターで全国の仲間に報告をしてくださいました。後で分ったのですが、このニュースレターが、高知医大産婦人科相良裕輔前教授（現在高知大学学長）の目にとまりました。地元では以前より「西南病院に産婦人科開設を」の動きが活発にありました。1985年高知医科大学産婦人科教室から医師を派遣していただくことが決まりました。1986年、相良教授が西南病院に来られ、職員に対して、「これからの周産期医療について」の講演をして下さいました。「赤ちゃんは1歳までは体外胎児だから、1歳までは産科が診るようになる」と言われました。その話を聞いた国立大村病院から来ていた研修医が、国立大村病院新生児科医長の故増本義先生に伝えたようです。増本先生は新生児学会の懇親会で、高知医大産婦人科医局員に「西南病院では小児科が新生児をきちっと診ているので、掻き回すようなことはしないように」と言う趣旨の話をしたようです。1987年1月、相良教授から私の所に電話が掛かってきました。「“まだ産婦人科がNICUを診ている”とは何事か。“西南病院では、産婦人科医による赤ちゃん診療はするな”とは何事か。産婦人科医が赤ちゃん診療をしてはいけないのか。時代遅れの無責任なことを言うのは許せん。おれは、お前も、仁志田も、増本もいつでも首をとばせる。そうなりたくなければ3人共、俺のところに来て、土下座してあやまれ！」と大変なお叱りを受けました。3人で相談し、「今後の日本の周産期医療のためにも、丁重に謝りを入れよう」ということに

なり、3人がそれぞれお詫びの手紙を書きました。出向いて土下座まではしませんでした。相良教授からは、「一応反省の態度は分った。今後の動きを見て又対処する。これで全て解決したと思うな」といわれ、そのまま今になっています。

## 6. 増本先生を偲んで：

増本先生と連絡会の関係は、その立ち上げの時から我々（特に筆者）を精神的にサポートしてくれたこと、活発に当時の新生児医療の置かれている問題を歯に衣着せぬ鋭い論法で発言し続けたことであろう。その彼の正義感が西南病院事件となったが、実はそれが内藤先生をして新生児医療連絡の必要性に思いを至らせるきっかけとなったのである。

増本先生の記憶に残る活動の一つは、1990年2月3-4日新生児連絡会設立の歴史の中でゆかりのある大阪のホテルアポロで行われた、連絡会主催の教育ワークショップを企画実行したことである。そのワークショップは、当時医学教育者の中では地獄の特訓と呼ばれて伝説となっていた富士教育セミナー（初代の医学教育学会会長牛場大蔵や日野原重明らが指導者となり、学部長クラスにも徹夜で与えられたテーマの教育プログラムをつくらせた。）の新生児版を医療連絡会が行ったものであった。故中川米造先生（医学概論）の名講義を聞いたことなどが懐かしい。

それ以上に、増本先生は真摯に長崎の地で新生児医療の地域化に貢献した。彼はNICU運営開始後しばらくの間、その経験と力量があるのに超低出生体重児には人工換気を行なわなかった。その理由は、レスピレーターが1台しかなく、1000グラム以下の児に人工換気を行う間に、何人のそれ以上に出生体重の大きな児が死亡するかを計算上知っていたからであった。レスピレーターが増えた後は、1000グラム以下の児においても人工換気を行うようになり、誰にも負けない成績を上げたことは言うまでもない。1990年故郷の愛媛県立中央病院に赴任してからの約2年間も、残念ながら志半ばで病に倒れたが、彼の地域医療を見据えた新生児科医としての仕事は余人の追従を赦さぬ素晴らしいものであった。